

モチーフを求めて

節子は、その時々で追求するモチーフがあり、その興味の幅は机上の静物から古代の埴輪、ヨーロッパの風景等、時代や場所を越えて大きく広がっていきました。節子が絵のモチーフを求め続けた軌跡をどうぞご覧ください。

好太郎を偲ぶモチーフ、アイヌ文様

画業の初期には、静物画・室内画を多く描いた節子ですが、夫・三岸好太郎(1903-1934)の影響を受けたと思われる、シュルレアリスムに接近した作品も残しています。《もや》は好太郎急逝の3年後、1937(昭和12)年に制作されました。

名古屋の裏街の日本の古代裂ばかり売つてゐる、古風な舗でアイヌの着物を買つたのである。この原始的な素朴さと強靭さを持つたアラバスクは私達の民族のもたない線の美しさをもつてゐた。(*1)

アイヌ文様の力強さに惹かれて、早速絵のモチーフに取り入れたという節子ですが、それは北海道出身の亡夫を想起させるものだったのかもしれませんが。背景に立ち込める赤黒いもやは、戦争が近づく不穏な情勢の中、3人の子どもたちを抱えて生きていく節子の不安な心情を反映しているかのようです。



《もや》(No.4) 1937年 ©MIGISHI

埴輪を描く理由

子どもたちと戦中戦後を生き抜いた節子は、1947(昭和22)年、女流画家協会を立ち上げ、画業の研鑽とともに女性画家の地位向上に努めました。そして1954(昭和29)年には、49歳で念願だった初渡仏を果たし、2年弱を彼の地で過ごしました。実際にヨーロッパの風土に触れたことで、かえって自分が日本人であることを再認識した節子は帰国後、埴輪や壺などの古代美術をモチーフに制作を始めます。埴輪をモチーフに選んだ理由を、節子はこう述べています。

人間が創るものは時代をさかのぼるほど、理屈がなく、作為がみえず、体温がつたはつてくるやうな、やすらぎがある。これらはにわをモチーフに選ぶのは、原水爆ばかりか、人工衛星の打ち上げられる時代に、未開非文明へのそこばくの抵抗ともいへよう。(*2)

戦後、あまりにも急速に進む近代化を危惧し、絵画という手段を用いて異議を唱える芸術家としての高い意識が感じられます。



《鳥と琴を弾く埴輪》(No.9) 1957年 ©MIGISHI

ヨーロッパの風景を求めて

再び節子がフランスに降り立ったのは1968(昭和43)年、63歳になってからでした。最初は南仏カーニュ、その後ブルゴーニュ地方のヴェロンにアトリエを構えると、そこを拠点にヨーロッパ各地を周って風景画を描きました。老齢に差し掛かっていた節子の滞欧を陰で支えたのは、息子で画家の黄太郎でした。後に黄太郎は、ヨーロッパでの生活を振り返ってこう述懐しています。

あれも描きたいこれも描きたいという希望を聞いて連れ回した。母は、次から次へと描く場所を変えている。それは何だったのだろうか。常に新しいモチーフを求め続けたいという欲望なのか。あそこに行きたいといえ、私がそれをかなえる。ただ、母の思いに従った。(*3)

歳を重ねてもなお旺盛に新しいモチーフを追求した、節子の姿が浮かび上がります。

20年間の滞欧生活を経て、84歳で帰国した後も、これまでにあまり描いてこなかった人物画への意欲を示していたという節子。晩年、病を得た後も絵筆を握り続け、94歳で亡くなるまで画家として生きました。その長い画業は、常に新しいモチーフを求め続けた軌跡ともいえるでしょう。

(*1) 三岸節子「人物」『現代洋画大全集15』アトリエ社、1936年

(*2) 三岸節子「スケッチブック」『花より花らしく』求龍堂、1977年

(*3) 三岸黄太郎「母、三岸節子の一生」『生誕100年記念三岸節子展 永遠の花を求めて』2005年